

On the System Characteristics of
Mikhail Bakhtin's Ideas (1):
From a Serial System Characteristic to an Architectonic System
Characteristic

TAKAHASHI Shin'ichi

This paper is the first half part of consideration where I aim to discuss the system characteristics of the ideas of Mikhail Bakhtin (1895-1975), specifically, those which emerge from his whole work, those in his thinking and those in his concepts. Bakhtin has been given various images so far, but in a sense I believe that he is a thinker and philosopher who aimed for "a system."

In this paper, first of all, from the viewpoint of the system characteristics that stand up from the whole work of Bakhtin, I examine Tzvetan Todorov's *Mikhail Bakhtine: le principe dialogique* (1981), the first attempt to build the whole image of Bakhtin in the European world, and clarify "a serial system characteristic" in Bakhtin's ideas. Secondly, I consider "an architectonic system characteristic" to be seen in Bakhtin's treatise *Toward a Philosophy of the Act* (1920-24) written at his early "philosophical" times while being based on Todorov's methodology and views.

Toward a Philosophy of the Act consists of two large parts. The first part is the introduction to a larger treatise on moral philosophy of which Bakhtin made the plan in those days. The introduction is followed immediately by the second part, namely, "part I." What is important in this consideration is the existence of this "part I." Because it has not been yet translated into Japanese, it did not enter the field of vision of the Japanese researcher.

Based on Vadim Liapunov's English translation, which gives an overview of *Toward a Philosophy of the Act*, I would like to clarify both an extensive philosophical project which Bakhtin aimed at and an architectonic system characteristic seen there.

ミハイル・バフチンの思想の体系性(1)

—— 系列的体系性から構築的体系性へ ——

高橋 伸一

TAKAHASHI Shin'ichi

はじめに

本稿はミハイル・バフチン (Mikhail Bakhtin: 1895-1975) における思想の体系性について、具体的には全著作から立ち現われる体系性、思考における体系性、概念における体系性について論じることを目的とする論考の前半部分である。

バフチンには今まで様々な像が付与されてきたが、彼はある意味「体系」を志した思想家・哲学者であると稿者はイメージしている¹。本稿ではまず、バフチンの全著作から立ち上がってくる体系性という観点から、西欧世界におけるバフチンの全体像を構築しようとした最初の試み²であるツヴェタン・トドロフの著作『ミハイル・バフチン 対話の原理』³ (1981) (以下『対話の原理』) を検討し、バフチンの思想における「系列的な体系性」を明らかにする。そして、トドロフの方法論と見解に基づきながら、トドロフが『対話の原理』を書いた際には彼の視野に入ることが不可能であった、バフチンの初期の論文『行為の哲学によせて』(1920-24) を鍵にしなが、ネーヴェリ時代とヴィテブスク時代、つまりバフチンの初期の「哲学的な時期」の思想に見られる「構築的な体系性」について考察していく。

この考察において重要になるのは、大きく2つに分けられる手稿の断片(前半と後半)から編纂された『行為の哲学によせて』の後半部分「I」(現段階で仮に「I」としておく)の存在である。この『行為の哲学によせて』の「I」については、日本では未翻訳であり研究者の視野にはなかなか入ってこなかった部分である。この「I」の部分についての考察を、『行為の哲学によせて』の全体像が分かるヴァジム・リャプーノフによる英訳版 (*Toward a Philosophy of the Act, 1993*)⁴ に基づきながら展開することによって、バフチンが最初期に目指していた「大部の哲学書」の構想を明らかにし、そこに見られる構築的な体系性を明らかにしていきたい。

また別稿においては、この構築的な体系性を支えるバフチンの初期の哲学的学究に注目し、ネーヴェリ学派におけるカント (Immanuel Kant: 1724-1804) および新カント派 (マルブルク

学派)、特にヘルマン・コーエン (Hermann Cohen: 1842-1918) の受容を検討しつつ、本稿におけるバフチンの構築的な体系性がトドロフの指摘する系列的な体系性とどのように関わるのか、という点について考察を深められたらと思っている。

本稿は全体的にバフチンの初期の活動に焦点を当てるため、1章ではバフチンの思想の体系性に大きな影響を与えたと考えられる「ネーヴェリ学派」の説明から入ることにしたい。⁵

1. 関与的思想家としての出発と背景：ネーヴェリ学派

バフチンが彼の活動の最初期、1918年から1924年頃までの「哲学的な時期」と称せられる時代に、新カント派の影響を受けていたことはすでに周知のことである⁶。この時期のバフチンの活動の拠点は、ロシア西部にあるネーヴェリ (現プスコフ州) とヴィテプスク (現ベラルーシ、ヴィテプスク州) という十月革命後知的な雰囲気醸成していた2つの町であった。そこでバフチンは、知的好奇心の旺盛な幾人かの若きメンバーたちが結びつき組織された「サークル」を基盤に、自らの包括的な文化活動を開始した。このサークルは、音楽家、詩人、文学者、哲学者など実に様々なメンバーによって構成されており、その後、研究者によっては「ネーヴェリ学派 (the Nevel school)」と呼ばれることもある⁷。ネーヴェリ学派の活動は、1918年から学派の会合が消滅する1927年頃まで続いたとされており、バフチンが居住した場所と時期から、その最初期に当たる1918年から1919年までが「ネーヴェリ時代」、1920年から1924年までが「ヴィテプスク時代」、それ以降を「レニングラード時代」と区分することができる。ネーヴェリ時代の学派の活動は、哲学的な議論や勉強会、公開での討論会など多岐にわたるが、その活動を中心に支えていたのは、のちに「ネーヴェリ哲学学派 (the Nevel school of philosophy)」と限定的に呼称される哲学的志向を有した人物たち、つまり、バフチンにL. プンピャンスキイ (Lev Pumpiansky: 1891-1940) と M. カガン (Matvei Kagan: 1889-1937) を加えた3名であった⁸。

プンピャンスキイはバフチンの大学時代の友人であり、ネーヴェリに来るようにと最初にバフチンに勧めたのも彼で、ネーヴェリ学派の中でも最も活動的な人物であった。プンピャンスキイは少なくとも1928年までは、宗教、神学、宗教哲学に熱烈な興味を抱いていた⁹。また彼は、バフチンが1924年から1925年に行った講義と論評を記述した貴重な「ノート」も残している¹⁰。一方、2歳の頃からネーヴェリに住んでいたカガンは¹¹、1909年にドイツに赴き、それ以降、ライプツィヒ大学、ベルリン大学、マールブルク大学で哲学を修めた。特にマールブルク大学では、ヘルマン・コーエンやパウル・ナトルプ (Paul Natorp: 1854-1924) といった新カント派 (マールブルク学派) の巨頭に学び、1914年には「デカルトからカントまでの超越

論的統覚の問題の歴史」と題する論文で博士号を取得している。しかし、その年に第一次大戦がはじまり、カガンは敵国人として逮捕された。新カント派のコーエンやナトルプ、エルンスト・カッシーラ (Ernst Cassirer: 1874-1945) の尽力で釈放されるまで、2カ月にわたって拘束された¹²。1918年にブレスト＝リトフスク条約が調印されるまで、カガンはドイツから出られなかったが、その後、ネーヴェリに戻り¹³、「サークル」(つまり「ネーヴェリ学派」)の始まりである最初の非公式の会合「カント・セミナー」を組織している¹⁴。

ネーヴェリ学派の活動は多岐にわたるのであるが、「カント・セミナー」の呼称が示すように、学派の活動はある一定の知的な傾向を有していたと思われる。それは学的理念と呼べるほどの結集力や原理力を持ったものではなく、ある種の学派の活動の性格のようなものである。その傾向とは当時の哲学的な問題や文化的な問題に解決の糸口を見つけるべく、メンバー各自の哲学的な見解を共有するといった傾向である。この傾向は、ネーヴェリ時代における学派の活動、特にバフチン、カガン、プンピャンスキイに顕著であり、この時期3人は定期的に会っては、お互いの哲学的な見解を対話させながら自らの思想を深めていった¹⁵。

それでは当時のロシアにおける哲学的な問題や状況とはどのようなものだったのか。この点についてクラーク&ホルクイストは次のようにまとめている。

1870年代から1920年代まで、ドイツにおける哲学の主流は新カント主義であった。そしてそのドイツを、ほとんどのロシア人は哲学の本場と見なしていた。ドイツだけでなくロシアにおいても、一流大学の哲学教授の椅子は新カント派の哲学者によって占められていた。バフチンの学生時代、新カント派はペテルブルク大学ではとくに深く根をおろしていた。新カント主義は広い範囲にわたる現象で、その傘下にはかなり異なる諸流派があった。どの派も出発点はカントであったが、さまざまな新カント哲学は、それぞれカントの著作の異なった側面に焦点をあて、それぞれ異なった問いをたて、異なった答えをだしていた。¹⁶

こうした新カント派の哲学を前提とするような哲学的状況は、ネーヴェリ学派に直接影響を与えていた。カガンという存在や「カント・セミナー」という会合を考えるだけでも、ネーヴェリ学派の思想的動向が新カント派の哲学、特にマールブルク学派の代表格であるヘルマン・コーエンの哲学にその波長を合わせていたことは容易に推察することができる。

ネーヴェリ学派とコーエン哲学との親密な関係は、とりわけそのメンバーたちの著作によってはっきりと示されている。マールブルク学派の用語法一式、特にコーエンの用語法

一式が、何の説明も必要とせず、一般的に認められた概念体系としてメンバーたちの著作で使われている。それらは、「与えられたものと課されたもの」、「問題」、「目的」（目的論）、「統一」（意識の、知識の、存在の、など）、「行為」、「応答責任」、「わたしと他者の相互関係」、「未決定性」（知識の）などの術語である。¹⁷

上記引用内の「そのメンバーたち」という表現で、著者のN.ニコラーエフが想定しているのは、バフチン、カガン、プンピャンスキイの3名である。この3名全員のネーヴェリ時代およびヴィテプスク時代の著作を稿者の視野に入れて考察することは稿者の能力を大きく超えることなので不可能だが、バフチンに限って言えば、指摘に見られる具体的なマールブルク学派（特にコーエン哲学）の諸術語は、バフチンの最初期の著作、具体的には『芸術と責任』（1919）、『行為の哲学によせて』（1920-24）、『美的活動における作者と主人公』（1920-24）、『言語芸術作品における内容、素材、形式の問題』（1924）の4つの著作を読んだことがある者なら、確かに頻出している術語であることはすぐに分かるであろう。さらには、その術語についての説明がほとんどなく、あたかも当然のごとくに用いられているのも読みの経験から首肯することができる。テキストと時間的距離のある読者にとっては、そうした術語の使用は、読みを立ち止まらせる要因にもなるのであるが、逆に術語のこのような使用は、如何に新カント派およびコーエンの哲学がバフチンの視野の中心を占め、思考の中に入り込んでいたのかを物語っているように思われる。そして、そうした状況がネーヴェリ哲学学派のバフチン、プンピャンスキイ、カガンの3名の関係においては、自らの視線を他の視野に移入し、再び自己に戻るということを繰り返しながら、まさに対話的に他のメンバーからの影響を取り入れながら自己の思想を深めていったのではないかと推測できる。

しかしながら、このようなコーエン哲学の吸収は、彼ら自身のオリジナルな哲学的立場を創出するという過程での、批判的な同化なのである。まさにコーエン自身が数多くのカントの概念を再解釈したり退けたりしながらカント哲学の見直しを行ったように、ネーヴェリにおけるコーエンの学徒たちは、コーエン哲学を修正した。事実、コーエンの優秀な弟子たちはすべてコーエン哲学の境界線を越えて行った。ネーヴェリのコーエン支持者の場合、同様に印象的なのは、一連の新しい問題に対処するために、コーエン哲学から出発したことなのである。¹⁸

カントに対する新カント派の批判的な向き合い方を、新カント派（コーエン）に対するネーヴェリ学派のそれと重ねて捉えるイメージには稿者も同意する。このイメージは新カント派に

おける標語が「カントに還れ」であったのに対して、ネーヴェリ学派の標語が「コーエンに還れ」だったことをも意味している。ただ、新カント派とネーヴェリ学派との大きな違いは「コーエンに還れ」という標語には、「カントに還れ」という標語も含まれているということである。この重層的に広がる哲学的伝統の視野からさらには、ネーヴェリ哲学学派という相互的に影響を及ぼし合う視野から、学派のメンバーたちはどのように独自の思想を築き上げていったのだろうか。次章では、まず登場人物をバフチンひとりに絞り、T. トドロフの『対話の原理』における考察をもとにしながら、バフチンの築き上げた思想の特徴について検討していきたい。

2. 哲学的思想家としてのバフチン思想の体系性：

T. トドロフ『対話の原理』における系列的な体系性

バフチンが彼の活動の初期、つまり、哲学的な時期において大きな影響を受けた新カント派（マルブルク学派）のその構成メンバーのひとりであり、社会的教育学説で著名なパウル・ナトルプは、前章で既述した通りネーヴェリ学派のカガンとも大変親密な関係にあった人物である。そのナトルプは、マルブルク学派の創始者であり学的活動の支柱でもあったヘルマン・コーエンが1918年4月に逝去したとき、同年5月にベルリンのカント協会で記念講演¹⁹を、7月にはマルブルク大学で追悼講演²⁰を行っている。そしてナトルプは7月の追悼講演で、コーエンの人物像について次のような示唆的な言葉を残している。「全体的な人間としてコーエンは人間性の全体性に精進し、従って必然哲学者としては体系に志した」²¹と。ナトルプがコーエンに対して描出するこのイメージは、カントは勿論のこと、同様にミハイル・バフチンにも照合することが可能なイメージであろう²²。すなわち、バフチンは、全体的な人間として人間性の全体性に精進し、従って必然哲学的思想家としては体系を志向した、と。ところで、バフチンの思想を考えていくプロセスの中で、なぜこうしたイメージから出発するのかと言えば、稿者自身このイメージによって、敢えて言うならば、このイメージを頼りにすることによって考察の視野が開けると考えたからである。

バフチンの著作全体の大きな特徴のひとつとして挙げられるのは、その「体系性」である。その著作の体系性、換言するならば思想の体系性は、まずは体系的な思考（思惟）そのものによって特徴づけられるものであり、また、特徴づけられねばならないものでもある。そして、その思想および思考（思惟）は、書く主体によって表現されたテキスト（表象）を通じて読む主体には感得（直観）されるものである。バフチンは、様々な学的領域に関与する複数のテキストを創出しているが、著作全体における体系性とは、それらの数多のテキストを単に合算したのではない。「体系」とは、「一つの理念の下でのさまざまな認識の統一体」であり、「こ

の理念を欠いた場合のさまざまな認識の集積 (Aggregat)』とは異なる。その意味で、「体系は全体の理念が部分に先行する場合に可能となり、部分が全体に先行する場合は、集積が生じるのみである」²³。バフチンの諸テキストを「集積」と見るのか、それとも「体系」と見るのか。この点について、T. トドロフは著書『対話の原理』第7章「哲学的人間学」の冒頭部分で、バフチン・テキストに対する次のような興味深くかつ大変示唆的な反応を提示してくれている。

私は私にとっての最大の価値のあるバフチンの思想 (les idées de Bakhtine) を最後に取っておいた。その思想はまた彼の作品全体 (son œuvre tout entire) を解く鍵であると思はる。その思想 (elles) はバフチン自身の用語を用いれば、彼の「哲学的人間学」を形成するのである。この思想は彼の道程 (son itinéraire) を通して驚くべき安定さ (une étonnante stabilité) をもって再現される。というのも、それは彼の最晩年の諸著作 (ses tout derniers écrits) においてのみならず、出版されたのは最近であっても、書かれたのはいちばん最初で (おそらく 1922 年と 1924 年のあいだ)、結局は完全な軌道 (trajectoire complète) を理解することを可能にしてくれる書物 (それは理論的美学および「道徳哲学」にかんする作品である。きわめて抽象的で詳細なものであるが、最終章は書かれずに終わり、第1章は失われている) にも同様に見出すことができるからである。それは他性 (l'altérité) に関する思想 (idées) である。²⁴ [原語・下線稿者]

上記の引用でトドロフがバフチンの著作全体の「道程」を視野に入れ、その途中途中で感得している「驚くべき安定さ」とは、読者がバフチンの著作全体を通じて感得することができるバフチンの思想の一貫性のようなものである。それは先に説明した「体系」についての概念で言えば、体系を成り立たせる「理念」的なものの直観から生じると考えてよいであろう。つまり、トドロフは、バフチンの個々の作品に先行する「理念」的なものを認める (感得する) ゆえに「彼の作品全体」へのアプローチに突き動かされていると言っても過言ではない。ところで、「理念」的なものを認めるこうしたアプローチは、アプローチ主体の立場に基づく具体的な視野からしか行うことができない。さらには主体の視野に映ずる対象としての「テキスト」は、時間的な制約——テキストを産出する主体にとっては「いつ書いたのか」、テキストを受け取る主体にとっては「いつ公開されたのか」等——を受ける。

ちなみに、1981年に出版されたトドロフの『対話の原理』は、バフチンの全体像を構築しようとした西欧世界における最初の試みの書であり、今までのバフチン研究の中でも方法論的にも正当な、もっとも貴重な研究の一つである²⁵。『対話の原理』第1章「伝記」において、トドロフは、1981年時点での彼の視野におさめることの可能なバフチンの文献 (目録) を基

礎に、バフチンの全活動を6つの時期に分け、バフチンの思想に対する次のような基本的な認識のもとに、方法論としては「年代的順序」の記述よりも「体系的なパースペクティブ」を優先させて考察を行っている²⁶。

たとえ正確な境界画定にはときおりためらいがある場合でも、バフチンの伝記にこれらの時期が存在することには議論の余地はない。ところで、同時にいえることは——これもまた同じく大いに正当なことであるが——、バフチンの作品には厳密な意味で発展がない、ということである。バフチンは興味の中心を替え、ときおり表明の仕方を変更する。だが彼の最初の著作と最後の著作、すなわち1922年と1974年のあいだでは、彼の思考は根本的に同じなのである。なぜなら、50年の距離をもって書かれていながら、ほとんど同一のフレーズが見出されるからである。発展の代りに発見されるのは、反復である。もちろん、この反復はしばしば部分的なものでしかないが、際限なく再開される捉え返し (*un ressassement éternellement recommencé*) なのである。バフチンのもろもろの著作は、徐々に形成されていくひとつの建造物の構成要素 (*composantes d'une construction*) というよりも、ひとつの系列の諸要素 (*éléments d'une série*) に似ている。これらの著作ひとつひとつは、いわば彼の思考全体 (*l'ensemble de sa pensée*) を含んでいるが、同時にその同じ思考の内部には、ずれを、知覚されるかされないかの位置の変更を秘めている。それがしばしばバフチンの思考の醍醐味をなすのである。²⁷ [原語・下線稿者]

トドロフは『対話の原理』において、バフチンの著作全体の個々の著作を「徐々に形成されていくひとつの建造物の構成要素」というイメージではなく、「ひとつの系列の諸要素」に似ているものとして捉えている。ところで、「ひとつの建造物の構成要素」としての個々の著作と「ひとつの系列の諸要素」としての個々の著作との間には、「体系」あるいは「全体」の性質との関連で考えた場合、どのような違いが存在するのであろうか。

その差異は、端的に言えば「体系」のイメージの違いである。「ひとつの建造物の構成要素」としての個々の著作は、バフチンによって課された目的に従って構築（あるいは統一）された著作群の要素ということになり、それはまずこの目的という理念においてすべての著作（要素）が互いに関係して全体像を作っているという状態である。このような体系は「建築術的」体系²⁸と呼ぶことができるかもしれない。そして、この体系は、「徐々に形成されていく (*progressivement élaborée*)」というトドロフの表現が象徴的に示すように、「その土台（基礎）から順番に」という空間的な秩序と、かつ「書かれた順番に」という時間的（年代的）な秩序の制約を受ける。最上階が最初に作られる「建造物」は存在しないのである。

一方、「ひとつの系列の諸要素」としての個々の著作は、年代順に並べてみたとしても、そのままでは単なる集積にすぎない状態である。しかし、この個々の要素が、バフチンの用語で言えば、「内的に統一ある意味」²⁹に貫かれる場合、「ひとつの系列」としての「体系」になる。トドロフが想定している「系列」としての「体系」とは、このような非建築術的・非構築的な体系であり、それは必然的に諸要素に共通に内包される内的で「理念」的なものを前提としている。

このようにバフチンの著作全体を系列的な体系とみなすトドロフは、バフチンの思考における中心的な対象の変化（対象の交換、中心点の移動）と、「理念」的なものを内包する思考そのものの内部における変化（「ずれ」あるいは「(立ち)位置の変更」、さらには表現の仕方の変更といった3つの可変的な要素を加味することによって、「ひとつの系列」の中に4つの具体的なアプローチ可能な領域（＝道筋）があることを発見している。その4つの領域とは、「認識論」、「超言語学」、「文学史」、「哲学的人間学」である。このような見取り図のもとで、トドロフは、バフチンの著作全体にわたる「驚くべき安定さ」、つまりバフチンの思想的な理念を根拠にしつつ、そこから立ち現われるテキスト上の差異を細かく探索し、それによってバフチンの体系性を立証しようとするのである。トドロフのその論証でもっとも重要な部分は、第7章「哲学的人間学」であろう。というのも、この章でトドロフは、バフチンの系列的な体系の「理念」的なもの——これがなくては「系列的」体系そのものが成立しない——を論証しようとしているからである。その論証の仕方も独特であり注目に値する。トドロフは、自らの視野に入るバフチンの様々な著作から、本文との割合で言えば多すぎると思えるほどの引用を直接、間接を問わず、かつ巧みに駆使しながら論証を行っている。

ところでこのようなトドロフによるバフチンの系列的な体系の「理念」的なものへのアプローチに関して、方法論的に重要になるのは、バフチンの「軌道」の起点と終点の両方にこの「理念」的なものが存在しなければならないという条件を満たすことであり——そうでない限り、「軌道」そのもの、「系列」そのものが存在しなくなる——、この条件から生じるその軌道の起点と終点をバフチンのどのテキストに置くのか、という問題である。この点については、トドロフの視野を考慮に入れながら少し詳しく検討を加えてみたい。

トドロフの視野が捉えた起点は、2つ前に引用した箇所の下線部から判明するように——「(それは理論的美学および「道徳哲学」にかんする作品である。きわめて抽象的で詳細なものであるが、最終章は書かれずに終わり、第1章は失われている)」——バフチンの『美的活動における作者と主人公』³⁰ (1920-24) である。そして、終点として考えられているのは、厳密に言えば、バフチンの1974年の最後のテキストに相当する『人文科学方法論ノート』³¹ であろう。しかし、「最晩年の諸著作 (ses tout derniers écrits)」という複数のテキストを想定して

いるようなトドロフの表現からすれば、終点は『より大胆に可能性を利用せよ』³²(1970)と『1970 - 71年の覚書』³³(1970-1971)を加えて、晩年の3つの作品と考えてもいいであろう。そしてトドロフは、起点と終点の両極にバフチンの「理念」的なもの、すなわち「他性に関する思想」を読み取ることによって、その2点を結ぶ「道程」の上に「哲学的人間学」というバフチンの全著作を貫いている「軌道」を浮き上がらせている。

さて、ここで注目したいのは『美的活動における作者と主人公』に関して、トドロフは2つ前の引用箇所で「結局は完全な軌道を理解することを可能にしてくれる書物」と説明していることである。ここには、トドロフによる『美的活動における作者と主人公』に対する特別なアクセントの付与を読み取ることができる。この第7章「哲学的人間学」におけるトドロフによるバフチンの引用文献冊数は11冊、そこからの引用回数全体は59回で、そのうち『美的活動における作者と主人公』からの引用は21回と最も多く引用回数全体の36%を占めている。他方、終点に関してはどうかであろうか。起点ほど明確なアクセント付けはなされていないが、「エグゾトピアの原理」(“Le principe d'exotopie”)というこの著作(『対話の原理』)そのものの鍵になる文言を直接引き出せるという点においてはバフチン最晩年、1974年の『人文科学方法論ノート』であろう。また、「エグゾトピアの原理」の説明としてまとまった言説を引き出せるという点では晩年の3つの著作でもっとも引用回数が多い『1970 - 71年の覚書』である。さらには「エグゾトピアの原理」のイメージの反復という点では、『美的活動における作者と主人公』と直接リンクする『より大胆に可能性を利用せよ』であろう。つまり、3つの著作にそれぞれ違った観点からアクセントが置かれていると解釈することができる。ちなみに「エグゾトピアの原理」とは、トドロフがバフチンの系列的な体系における「理念」的なものとして読み取っている概念であり、「他性に関する思想」を形成する概念体系における中心原理である。トドロフは、バフチンの用語で言うところの「みずからを外部に見出すこと(вне-находимость)」というロシア語の造語を、ギリシア語の語根の助けを借りて、「エグゾトピア(exotopie)」という新語に変形し、それを訳語に当てている³⁴。関連して述べておくならば、この概念は、トドロフの『対話の原理』の結構のまさに中心的なものでもある。(「エグゾトピア」についてはまた後ほど説明するつもりなので、ここでは深入りせずに概念の提示だけに留めたい。)

以上、トドロフの「哲学的人間学」の軌道の考察におけるバフチンの著作の起点と終点への彼のアクセント付けについて説明してきたが、ここで稿者は、次章以降の立論を展開させるために、トドロフが読み取ったバフチンの「哲学的人間学」の軌道を要約的に提示してみたいと思う。提示の仕方については、トドロフが考察に織り込んだ様々なバフチン文献からの引用を3つ選択し(この3つはそれぞれ異なったテキストから)、それを起点と終点を意識しながら

配列してみたい。要約で扱う文献は、起点に関しては『美的活動における作者と主人公』（1920-24）であり、終点に関しては『より大胆に可能性を利用せよ』（1970）と『人文科学方法論ノート』（1974）である。こうした要約を提示する意図は、決してトドロフの起点と終点との結びつきを弱めるためではなく、その軌道そのものを確固としたイメージとして分かりやすく理解するためであることを先に述べておきたい。また、晩年の1970年に発表されたエッセイ『より大胆に可能性を利用せよ』を入れるのは、このテキストの特徴を考えた上のことである。（このエッセイの邦訳者である桑野隆は「このエッセイはバフチン最晩年の発言としてきわめて貴重なものであると考えている。バフチンの文学観、文化観が当人名ででている著作のどれとくらべても平易に語られていると同時に、当初からのバフチンの一貫した見解が随所に読みとれる」³⁵と述べている。）また、注意として断りを入れて置きたいことが2点ある。下記のバフチンの引用部分に関しては、バフチンのロシア語テキストから直接翻訳されている邦訳文献を使用していること、さらには、トドロフの『対話の原理』において独自に言い換えられている「エグゾトピア」という語に関しては、ブランクセット（〔 〕）で併記していることである。

【引用①：起点『美的活動における作者と主人公』（1920-24）より】

自分自身は、外貌の内にあるもの、それに包まれ表現されているものとして感じることはない。〔……〕この意味で、人は他者を、他者の見、記憶し、収集し、統合する活動を、ぜひとも美的に必要とするわけである。この活動だけが、外的に完結した彼の人格を創るのであって、この人格は、もしも他者がそれを創造しないならば、存在しないだろう。³⁶

【引用②：終点『より大胆に可能性を利用せよ』（1970）より】

他者の文化をよりよく理解するためにはいわばその文化のなかに移り住み、自分の文化を忘れて他者の文化の眼で世界を眺める必要があるといった、きわめて根強いものの、一面的で、それゆえにまちがった考えが存在している。このような考えは、すでに述べたように、一面的である。もちろん、他者の文化のなかへ生をある程度移入すること、世界を他者の文化の眼で眺められることは、理解の過程で不可欠な契機である。だが、もしも理解がこうした契機に尽きるならば、それはたんなる物真似となり、新しいものや豊かにしうるものを何ひとつもたらすことはないであろう。創造的理解というものは、自分自身や、時間上の自分の場、自分の文化を放棄せず、何ひとつ忘れはしない。理解にとってきわめて重要なのは、理解者が、自分が創造的に理解しようと望んでいることにたいして——時間、空間、文化において——外部に位置していること〔エグゾトピア〕である。自分自身

の外貌ですら本人は真に眼にし全体を意味づけることはできないのであり、いかなる鏡や写真も役立たないのである。その者の真の外貌を眼にし理解できるのはほかの人びとだけであり、それはその人びとが空間的に外に位置している[人びとの空間的エグゾトピアの]おかげであり、かれらが他者であるおかげなのである。

文化の領域においては外在性[エグゾトピア]こそが、理解のもっとも強力な梃子なのである。他者の文化は、もうひとつの文化の眼にとらえられてはじめて、みずからをいっそう十全にかつ深くあきらかにする(ただし、全面的にというわけではない。というのも、他の諸文化もあらわれ、それらがさらに新たに眼にし理解するからである)。³⁷

【引用③：終論『人文科学方法論ノート』(1974)より】

理解とは他人の言葉が《自分=他人》のになるということ。現存在の外にあるという原理[エグゾトピアの原理]。³⁸

上記の引用①の『美的活動における作者と主人公』(1920-24)の部分は、「外在性」(即ち「エグゾトピア」)の概念が、バフチンによってもっとも明確な、かつ映像的なイメージとして定着されている箇所である。自己が鏡の中に見出す自己のイメージや自画像の不完全さを指摘しながらバフチンが強調するのは、自己自身による自己の知覚や理解において自己の全体性を形成するためには、自己の外部に位置する他者の眼差しや他者の視角の「余剰」が不可欠だということである。引用②では、「創造的理解」というバフチンのキー概念のひとつが文脈に導入されるが、その議論の底流に流れているのは、引用①における自己と他者のイメージであり、その上に自文化(自己)と異文化(他者)の関係が捉え直されている。そして、引用③においては、「創造的理解」が再び自己と他者の関係として〈言葉〉をモチーフにしながら再度捉え返され、こうしたバフチンの思考の繰り返しの根源であるところの理念的なものが、「現存在の外にあるという原理」即ち「エグゾトピアの原理」という語に集約してまとめられている。

ここで提示した3つの引用だけを見てもトドロフが読み取ろうとしたバフチンの「他性に関する思想」は明らかであるし、また、トドロフが見出したバフチンの著作全体における「系列的な体系性」も理解することができるのではないであろうか。ちなみに、本章ではトドロフが指摘している「哲学的人間学」の軌道についての、「哲学的人間学」そのものについては具体的に説明をしておかなかったが、次章以降の考察のために、現時点での稿者の見方を端的に提示し、バフチン自身、この概念についてどのような言葉を付与しているのかを確認しておきたい。「哲学的人間学」とは、外在性(即ち「エグゾトピア」)を原理にし、以下に引用するバフチンの説明に見られる「自分の私」「他人の私」「私にとっての他人」を共通要因とした人間の「結

構」に関わる学である、と言うことができるかもしれない。

哲学的人間学について——

私自身の私のイメージ。自分自身について、自分の私全体についての想像は、どんな性格を持っているか。他人についての私の想像と、その原理的な違いはどの点にあるのか。私というイメージあるいは概念、あるいは経験、感覚等々。このイメージの在り方。このイメージの成分は如何（例えば、私の体について、私の外貌、過去について等々の想像はそこにどのように入ってくるか）。《私は生きる》《私は死ぬ》《私は在る》《私はいないであろう》《私はいなかった》といったことを語り経験するとき、私のもとに私は何を理解するか。自分の私と他人の私、私にとつての他人と。私のなかで私に直接与えられるものと他人を通してしか与えられないもの。最小限と最大限——単純な自己感覚と複雑な自己意識。だが最小限に課せられたものが最大限に展開する。自己意識の歴史的展開。それは表現の記号的手段（なによりも言語）の発展とも関連している。自伝の歴史（ミシュ）。私の像の不均質な成分。鏡のまえの人間。私のなかの非私、つまり私のなかの存在、私のなかの私より大きなもの。どの程度私と他人とがひとつの中性的な人間像に統一されうるか。ひとつの関係（例えば愛）によってのみありうる感情とただ自分自身にのみよる感情（例えば自己愛や自己放棄など）。私の時間的、空間的境界は私によっては与えられないで、そのすべては他人によって与えられる。私は一空間世界に入っていくと、そこにはつねに他人がいる。私と他人との空間、時間の違い。それは生きた感覚としてあるのだが、抽象的思想がそれを拭い去ってしまう。思想は私と他人と無関係に、人間のただ一つの一般的な世界を創り出す。素朴な自然な自己感覚のなかで私と他人とは融合する。そこには利己主義も利他主義もさらさない。

私は他のもの、他の人のなかにかくれ、ひたすらひとの為に他のものになろうとして、ひとつの世界に他のものになって入り、私（自分にとつての私）という世界の唯一の重荷を自分から投げ捨てる。³⁹

3. バフチンの「行為の哲学」の軌道

——「大部の哲学書」構想における構築的な体系性

3-1 「哲学的人間学」の軌道から「行為の哲学」の軌道へ

トドロフがバフチンの著作全体から「哲学的人間学」の軌道を読み取ったことは前章で確認したが、トドロフの考察を踏まえて本章でまず問題提起したいのは、バフチンの著作全体からは別の軌道が読み取れるのではないか、ということである。その軌道とは、結論的に言えば「行

為の哲学」の軌道である。この軌道は、トドロフの「哲学的人間学」の軌道に密接に関わりかつ重複するような性質を有する軌道なのであるが、それでも敢えてここで稿者が「行為の哲学」の軌道について問題提起するには2つの理由がある。ひとつは、既述した考察主体の視野の問題があるからである。そして、もうひとつは、この「行為の哲学」の軌道を措定することによって、トドロフが見出したバフチンの系列的な体系性とは異なる別のタイプの体系性を、つまり、「構築的な体系性」を読み取ることができるからである。まずは、ひとつめの理由から説明していきたい。

トドロフが『対話の原理』(1981)においてバフチンの全体像へのアプローチを行った際には、「行為の哲学」の軌道の理解を可能にしてくれる論文『行為の哲学によせて』(1920 - 24)は、まだ世の中に公開されていなかった。それ故にトドロフは、必然的にバフチンの「哲学的人間学」の軌道の起点としてのアクセントを、自らの「バフチンとバフチン・サークルの著作の年代順リスト」⁴⁰の中にある、年代順では3番目に位置する『美的活動における作者と主人公』に置かざるを得なかったと思われる。もちろん、『美的活動における作者と主人公』から始めてはいけない、ということを行っているのではない。ただ、稿者は『行為の哲学によせて』にアクセントを置き、トドロフの「哲学的人間学」の軌道に密接する、しかも『芸術と責任』(1919)を起点とするような軌道を最終的には読み取りたいと思っているのである。稿者にこうした試みを促す要因は、『行為の哲学によせて』と『美的活動における作者と主人公』の双方のテキストにある。この2つのテキストは、同一の要素、換言すれば、重なる要素を持ちながらも、実はバフチンがテキストを完結させようとする(どちらも未完ではあるが)「結構」という観点において、その中心的な要因がそれぞれ異なる、と考えることができる。トドロフ風に言えば、〈書く行為〉におけるバフチン自身の「立ち位置」の微妙な「ずれ」が存在している、と行うことができるかもしれない。前置きはこれぐらいにして、この2つの論文の今述べたテキストについては徐々に明らかにしていくつもりであるが、その前にこれらのテキストについて基本的かつ書誌的な情報を中心に具体的に説明していきたい。

論文『行為の哲学によせて』は、バフチンが、初期の哲学的な時期、ネーヴェリ時代(1918 - 19)に続く1920年代の初めのヴィテプスク時代(1920 - 24)に着手した論文であるとされている⁴¹。そして、この論文は、「現実世界、美的活動、倫理、宗教の各領域をトータルにあつかう大部の哲学書の構想の序論の部分にあたるもの」として書かれたとされるのが定説である(その根拠については後で説明する)⁴²。『行為の哲学によせて』と『美的活動における作者と主人公』の2つの著作がいつ書かれたのか、という執筆時期の問題については、正確なところはわかっていないが⁴³、この2つの論文のロシア語版の編纂者であるポチャロフの説明に依るならば——『「道徳哲学に関する論文に取り組んでいる文脈で美学論文『美的活動にお

る作者と主人公』を書き始めた」⁴⁴——、『行為の哲学によせて』が『美的活動における作者と主人公』よりも前に書かれ始め、のちに『美的活動における作者と主人公』の取り組みが開始された、と考えるのが妥当なように思われる。

次に、この2つの論文がどのように公開されたのか、という点について述べておく。公開された順番は、今説明した執筆開始の順番とは逆で、『美的活動における作者と主人公』が先に公開され、後に『行為の哲学によせて』が世に出た。ただし、後述するように、『美的活動における作者と主人公』の「第1章」のみは、『行為の哲学によせて』と同時に公開された。どちらの論文も、バフチンの死後、手稿として残されていたものが製版され、テキストとして出版されたという点では共通点を持っている。

ところで『美的活動における作者と主人公』と『行為の哲学によせて』の2つのテキストには、「第1章」あるいは「I部」なる部分が存在する。この2つのテキストの「第1章」・「I部」は、テキストそれ自体の物質性という点で（つまり、その保存状態と再現性という点で）、さらには、それぞれのテキストに前後する他のバフチンのテキストとの関係性の点で、大きな困難と問題点を孕んだテキストである。しかし一方、これらの2つのテキストには、こうした困難や問題点を凌ぐだけの、とても重要な意味・価値が宿っていると稿者には思われる。では、先に『美的活動における作者と主人公』の「第1章」を、その後で『行為の哲学によせて』の「I部」の順番で詳しく説明していきたい。

『美的活動における作者と主人公』の「第1章」は、トドロフが本稿2章の一番最初の引用箇所（下線）で「第1章は失われている」と説明している「第1章」のことである。ちなみにこのあと説明が少し複雑になるので、分かりやすくするために、現在明らかになっている『美的活動における作者と主人公』の全体構成について邦訳版⁴⁵を基にして先に示しておきたい。

- 第1章 断片
- 第2章 主人公に対する作者の関係の問題
- 第3章 主人公の空間的形式
- 第4章 主人公の時間的全体
- 第5章 主人公の意味的全体
- 第6章 作者の問題

『美的活動における作者と主人公』の「第1章」とは、「最初の部分を欠いた草稿断片」⁴⁶であり、この草稿をベースに製版されたテキストを、今後、邦訳版の構成に倣って『美的活動における作者と主人公』の「第1章断片」あるいは「第1章断片『美的活動』」と呼ぶことにする。

この「第1章断片」は、『行為の哲学によせて』の草稿を製版したテキストとともに、1986年モスクワ刊のソビエト科学アカデミーの年鑑『科学と技術の哲学と社会学、1984-1985年』に初めて掲載された⁴⁷。

一方、『行為の哲学によせて』は、手稿段階では、大きく2つのテキスト体、すなわち、前半の部分のテキスト体と後半の部分のテキスト体に分けられる。便宜的に草稿段階でのテキストを『原-行為の哲学によせて』とするならば、この『原-行為の哲学によせて』の前半部分のテキストが「大部の哲学書の構想の序論」に相当する部分であり、邦訳版の『行為の哲学によせて』のテキストはこの「序論」の部分に一致する。一方、『原-行為の哲学によせて』の後半部分は、バフチンによって実際に「I」というナンバーが手稿に付与されており⁴⁸、前半部分と区別することができる。この後半部を本稿では『行為の哲学・I部』と呼ぶことにする。関連して、『原-行為の哲学によせて』の前半部分については、『行為の哲学・序論』と呼び、両者を合わせる場合には『行為の哲学によせて(全体)』という名称を用いることにする。

次に『行為の哲学・序論』が「大部の哲学書の構想の序論」に相当する、ということについて説明していきたい。

バフチンによる「大部の哲学書」の構想が具体的に明らかになるのは、以下に示す『行為の哲学・序論』においてである。参考までに述べると、クラーク&ホルクイストは、『行為の哲学によせて(全体)』が公開される前に刊行された『ミハイル・バフチーンの世界』(1984)の中ですでに、1918年から24年までにバフチンが取り組んでいた複数のテキストを対象にしながらか、この構想についてより広い意味からの指摘を行っている。そして、その構想(計画)をバフチンの全活動の中でも特に重要なものとして認識する一方、それをイメージしやすいように「同一の書物(the same book)」として想定し、その「1冊」に『応答責任の構築学(*The Architectonics of Answerability*)』という具体的なタイトルを与えている⁴⁹。それでは、バフチンが「大部の哲学書」の構想について具体的にどのように言及しているのかを見てみたい。その箇所は、『行為の哲学・序論』の終わりに近いところにあり、ひとつの段落で構成されている。

この著作のI部で検討するのは、思考ではなくて体験される現実の世界の、結構の基本的な諸要因である。ついでII部では、行為としての美的活動を、その所産の内側からではなく、責任ある参与者としての作者の観点から検討し、さらに〔二語判読不能〕芸術的創造の倫理学を検討することになる。III部では、政治の倫理学を、そして最後に、宗教の検討をおこなう予定である。その世界の結構が想起させるのは、ダンテならびに中世の宗教劇の世界の結構である(宗教劇でも悲劇でも、できごととはやはり存在の究極の領域に引き

よせられている)。⁵⁰

上記の「段落」(以後、この段落を「構想段落」と呼ぶことにする)において示されているのは、確かに特定の作者がこれから書こうとしている「構想」であることに間違いない。バフチンのこの構想を今まで説明してきた情報を踏まえ、仮説的に示すと次のようになるであろう。

序論部：『行為の哲学・序論』

I部：思考ではなくて体験される現実の世界の結構の根本的な諸要因
(『行為の哲学・I部』)

II部：『美的活動における作者と主人公』

III部：政治の倫理学

IV部：宗教

「行為の哲学」の軌道を検討するに当たって、上記に引用した「構想段落」は、最重要な部分であると稿者は考えている。その理由のひとつは、この「構想段落」が存在することによって、『行為の哲学によせて(全体)』が「大部の哲学書」の——結果的には未完成だが書きかけの文書の——の中の「一部」であるというイメージが生まれるからである。そしてこのイメージに基づいて、『行為の哲学・序論』が「大部の哲学書」における「序論」に相当するという判断が生まれるのであり⁵¹、同様に、『美的活動における作者と主人公』をこの「大部の哲学書」の構成要素として、つまりは「大部の哲学書」の「II部」に相当する部分としてみなすことが可能になるからである。

ところで、このことに先立ち、検討しなければならない大きなかつ決定的な問題がひとつある。それは、『行為の哲学・I部』が、バフチンの「大部の哲学書」の構想を示している「構想段落」の延長線上に、すなわち、『行為の哲学・序論』の延長線上に位置するのか、という問題である。

この点に関して考察するためには、まずは『行為の哲学・序論』がどのような性格の論文であるのかを振り返っておく必要がある。

3-2 『行為の哲学・序論』：批判という言説ジャンルの認識論

まず、『行為の哲学・序論』がどのような論文であるのかについて考察するに当たって、それがどのようなジャンルの論文なのかという点から検討を始めていきたい。

『行為の哲学・序論』は、〈言説のジャンル〉の観点から言えば、「批判」(あるいは「批評」)

というジャンルに、論の性格からは「認識論」に属していると見なすことができる。ここでいう「批判」とは、広義の意味での「批判」である。すなわち、それは「批評」と同義で、「ある事実や思想や行動について真偽、優劣、可否、是非、善悪を判定し、価値をあきらかにし、評価をくだすこと、さらには「与えられた対象をその要素に分割し、その要素と全体との連関を明らかにし、認識の真理性に照らして、全体的な連関において評価すること」である。この意味の「批判」は「認識論とふかい関連」を有している⁵²。認識が、ガストン・バシュラールが説明するように、「ひとはまちがって形成された認識をうちやぶりながら、精神のなかで精神的解釈の障害となるものをのりこえつつ、以前の認識にさからって、認識をおこなう」のであれば、バフチンの『行為の哲学・序論』における批判は、批判のための批判ではなく、その批判される対象の「以前の認識にさからって (*contre une connaissance antérieure*)」の認識であり、その彼方に新しい認識の地平を開くための批判である、と指摘することができるかもしれない⁵³。

バフチンにとっての新しい地平とは、「行為の哲学」の地平である。一方、バフチンが厳しく批判の対象とし、「精神のなかで精神的解釈の障害となるもの」として「のりこえ」ようにするのは、「近代、それも19世紀と20世紀にのみ特徴的」⁵⁴だとバフチンが判断する哲学のひとつの傾向(性質)である。それは、バフチン自身の用語を用いるならば、哲学の「理論主義(теоретизм)」⁵⁵あるいは「理論主義」的な傾向である。バフチンがこの「理論主義」を批判するのは、それが人間の主体の行為が有している全体性を破壊し、本来は関与的でなければならない、主体と客体、生の世界と文化の世界、理論と実践(行為)、行為と行為の所産、等間に二元論的な分裂を引き起こすからである。また同時に、それによって人間の主体の〈生〉を根拠づける主体の側からの能動的で関与的な意味の統一(あるいは意味産出行為)を疎外し、主体みずからの「現実の責任ある行為の遂行のための場所」⁵⁶を危うくさせ、消滅させようとするからに他ならない。このような認識は、『行為の哲学・序論』では、ひとつは「現代」に対する危機意識として、もうひとつはバフチン自身の主体的・内的な叫びとして、次のような表現となって表れている。

現代の危機の根底にあるのは、現代の行為の危機なのである。行為の動機と行為の所産のあいだに深淵が生じてしまった。だがその結果、行為の所産も、存在論的な根から切り離されて凋んでしまったのである。金銭は、道徳的なシステムを構築する行為の動機たりうる。経済的な唯物論は現在という時点では正しいのだが、しかしそれは、行為の動機が所産の内部に浸透したためではなく、むしろ逆に、所産の意義が、行為の現実の動機づけから遠ざかっているためなのである。だがもはや所産の内側から事態を正すことはできな

い。そこには行為への突破口がないから。そうではなくて、行為そのものの内側から正さなければならないのである。理論的な世界と美的な世界は、自由に振る舞うことが許されているのだが、しかしその内側からは、この二つの世界をむすびつけて最終的な統一に参加させ、両者を受肉させることはできない。理論が行為から遊離して、その内在的な法則にしたがって発展を遂げているために、理論を手放した行為のほうは退歩し始めている。責任をもって遂行する力はすべて、文化の自律的な領域に去ってしまい、その力から切り離された行為は、初歩的な生物学的、経済学的な動機づけの段階にまで零落して、みずからの理念的な要因をまったく失ってしまっている。これが今日の文明の置かれた状況なのである。⁵⁷

だが、内部では揺るぎなく純粋で、全体がそっくり正当なこのわたしの思考のプロセスを、どこに、どうやって組み込んだらよいのか？ 意識の心理学にか？ それとも、然るべき学問の歴史にか？ それとも、思考が現に行数になった分だけ支払われるものとして、わたしの生活費のうちにか？ それとも、五時から六時まで行なわれた仕事として、わたしの一日の時間の秩序のうちにか？ わたしの学問的な職務のうちにか？ だが、こういったすべての意味づけの可能性もコンテキスト自体も、何やら真空をさまよっており、どのような単一の、唯一のものにも根ざしていないのである。現代の哲学もまた、そのような参加のための原理を与えてはくれず、この点に哲学の危機が存するのである。行為は、客観的な意味内容と、遂行の主観的プロセスとに分裂している。⁵⁸

上記に見られるような主体の危機は、「所与の行動・活動がもつ内容・意味」と「その行動・活動の存在の歴史的な現実性、その行動・活動が現に一回かぎり体験されること」との間に設けられた「原理的な区分」によって、「みずからが担う価値を失い、生きた生成と自己完結の統一を失うことになる」歴史的な主体の危機でもある⁵⁹。このような現実の危機に直面する「現代人」のイメージを、バフチンは以下の部分でアイロニカルに描写的に説明しているが、妙に説得力があるのが興味深い。21世紀の今を生きる現代人はこの部分をどう読むのだろうか、と個人的には思ったりもする。

現代人が確信をもち、豊かで、明晰でありうるのは、文化の領域の自律的な世界とこの世界に内在する創造の法則のなかで、自分が原理的に存在していないばあいになのであり、いっぽう、彼が確信をもてず、貧相で、明晰さを欠くのは、現実の唯一の生のなかで、自身を相手にし、自分が行為をおこす中心となるばあいになのである。つまり、われわれが

確信をもって行為するのは、自分の意志にもとづいてではなく、あれこれの文化領域の意味に内在する必然性にとり憑かれている時になのであって、〔そこでは〕前提から結論へといたる行程が、揺ぎなくあやまたずに遂行される、なぜなら、その行程のうちにはわたし自身が存在しないからである。⁶⁰

ところで、このようにバフチンが批判の対象とする哲学的な理論主義の大きな特徴は、3つにまとめることができるであろう。ひとつめは、生の世界を捨象し、理論的な認識の世界（理論的な認識の対象としての世界）だけで「自己完結すること」⁶¹を主張する点に在る。二つめは、「抽象的理論の独自の法則」を持ち「自発的に発展をとげる」個々の理論的な領域に「自治権」を与え、「その全体をもって世界全体なのだ」、「そのありうべき全体が、抽象的に単一であるだけでなく、具体的な唯一の存在であるのだ」と主張する点に在る⁶²。最後は、主体の忘却ないしは破棄（「唯一の自分を捨象すること」⁶³）によって、行為の所産のみが唯一の実体と見なされ、主観的な意味や価値を排除して対象を認識すること、自然科学的に対象を認識することが目指されるという点である。

こうした哲学の理論主義的な傾向は、それに拠って立つ文化の理論一般にも影響を与えるのは当然のことである。例えば、この傾向が倫理学に与える影響をバフチンは次のように説明する。

理論主義に対する批判はほとんどそっくりそのまま、倫理学の諸体系にも適用しうるのである。⁶⁴〔……〕さて、破滅をもたらす理論主義——唯一の自分を捨象すること——が生じるのは、形式主義の倫理学においても同様であって、そこでいう実践理性の世界とは、実際には理論的な世界であり、行為が現実には遂行される世界ではないのである。⁶⁵

また、美学に関する影響については『美的活動における作者と主人公』の中で次のように説明している。

こうした貧しくする理論は、自分の唯一の位置の放棄、他者への対立の放棄、単一の意識への同化、一致さらには融合を、文化的な創造の根底に置くのだが、こうした理論のすべて、そして何よりもまず美学の表現理論は、19世紀および20世紀の全哲学的教養の認識論的な傾向によって説明される。認識の理論が、他のすべての文化領域の理論のモデルになった。倫理学すなわち行為の理論は、すでに実現された行為を認識する理論にとって代われ、美学すなわち美的活動の理論は、すでに実現された美的活動を認識する理論に

とって代わられた。つまり、美的実現の事実そのものを直接、対象とするのではなく、この事実のありうべき理論上のトランスクリプション、その事実の認識を、美学の対象とすることになったのであり、このゆえに、できごとの実現の統一は、意識の統一、できごとの理解の統一にとって代われ、主体すなわちできごとの参加者は、できごとを傍観的に、純理論的に認識する主体になったのである。⁶⁶

今引用した2つの文章から、『行為の哲学・序論』を書くというバフチンの具体的な行為における直接の要因、バフチンの用語を用いれば、その行為の「結構」における中心的なもの、揺るぎないものが理解できるのではないかと思われる。それは、上記引用で示されている哲学的な理論主義の隆盛と諸文化理論におけるその一般的な流布と受容（影響）という当時の思想状況に対する危機意識である。さらには、こうした理論主義に対する危機意識がバフチンによって何度も行われた諸学問における理論批判（例えば、初期作品では『美的活動における作者と主人公』における感情移入美学と素材主義美学の理論批判、『言語芸術作品における内容、素材、形式の問題』におけるロシア・フォルマリズム美学に対する理論批判など）の背景にあるのではないかと推察することができる。

以上、「批判」というジャンルの認識論の性格を有するバフチンの『行為の哲学・序論』について、その批判の対象の地平について考察してきたが、次節では、批判の彼方に位置づけられるバフチンの新しい地平（認識）であるところの「行為の哲学」について検討していきたい。

3-3 『行為の哲学・序論』：新しい認識としての「行為の哲学」

『行為の哲学・序論』のテキストを考える上でのポイントは、このテキストが「以前の認識」——当時すでにあった認識、具体的には理論主義——の批判という側面と、その批判の彼方に新しい認識の地平——行為の哲学——を開くという側面を有している、ということである。前節では「批判」の側面に絞って考察を行ってきたので、バフチンのこの側面のみ強調する形になったが、『行為の哲学・序論』では、この2つの側面が別々に分かれて論じられているわけではない。つまり、バフチンはこのテキストの中で、当時の哲学の理論主義的な傾向とそれに拠って立つ文化理論一般の批判を、バフチンの新しい認識である「行為の哲学」を立てながら、極端に言えば、武器として用いながら「うちやぶろう」と批判しているのである。このことから推察されるのは『行為の哲学・序論』では、批判の側面に重点が置かれるあまり、バフチンにとって意味・価値のある「行為の哲学」の思想が十分に展開されていないのではないか、ということである。こうした特徴は『行為の哲学・序論』が読者に与える印象、例えば「抽象的だ」とか「難解だ」という一般的な印象に直接結びついているように思われる。

ここで先に結論的なことを言えば、バフチンは、自らの内側にある「行為の哲学」の思想を構成する、あるいはそれを測量する器具であるところの諸概念、例えば「行為」、「存在のできごと」、「統一」、「応答責任」、「関与的」等の中心的な用語（本稿1章で説明した新カント派の用語でもある）を十分に用いながら、批判の対象である「理論主義」に逆らっているのであるが、その自らの用語に関しては、「行為の哲学」の思想を分析的に展開するという意味で、明確な定義や説明を与えていないのである（この点については本稿1章で説明したネーヴェリ学派の新カント派の用語の使用法と同じ傾向を示しているが、バフチンが自らの思想を提示するという意図を踏まえた場合、事はそう簡単ではない）。もちろん『行為の哲学・序論』が批判に力点を置き、読者に自らの新しい地平を予感させる程度のことを目的としているならば、このようなことは特に問題にはならないし、十分に『行為の哲学・序論』では「行為の哲学」に対するバフチンの情動・意志的トーンや思考の際の情念の躍動は伝わってくる。ここで大切になるのが「大部の哲学書」の中で、バフチンは新しい認識としての「行為の哲学」の地平へ、どのようにあるいはどの程度「歩んでいくのか」というヴィジョンである。このヴィジョンによっては、『行為の哲学・序論』の意味は大きく異なってくるからである。

稿者が推測するのは、こうである。バフチンは、哲学的な理論主義を乗り越えようと、その代わりに「行為の哲学」を定立した。そして、その「行為の哲学」に拠って、哲学的な理論主義に拠って立っていた諸文化の理論を、3つの文化の領域（認識、道徳、芸術）に宗教の領域を加えた、4つの領域において体系的（構築的）かつ関与的に記述し直そうという意図があったのではないかと、ということである。そして、このように考えると『行為の哲学・序論』にある「大部の哲学書」の「構想段落」が重要な意味を持ってくる。つまり「大部の哲学書」の「序論」に当たる『行為の哲学・序論』は、バフチンの「行為の哲学」の思想を十全に語るセクションではなく、ここは批判を通じた「問題提起」としての部分であり、「行為の哲学」の思想については、「大部の哲学書」の「I部」すなわち「思考ではなくて体験される現実世界の結構の根本的な諸要因」の部分で展開しようとしていたのではないかと、ということである。

この仮説を立証するためにまずは、今稿者が推論として提示したバフチンの意図が具体的に実現するにはどのようなことが必要なのかを考えなくてはならない。つまり「行為の哲学」に拠って立つ4つの領域の諸文化の理論を構築するためには、何をすることが必要なのか（しかし、この問いは、この文脈においては言い換えが必要である。正確には、「行為の哲学」に拠って立つ3つの領域の諸文化（道徳、芸術、宗教）の理論を構築するためには、何をすることが必要なのか、という問いになる。「認識」の領域を差引いたのは、この領域は「大部の哲学書」の「序論」から「IV部」までの諸文化の領域すべてを包含する領域なので、「大部の哲学書」に通底する「思考（思惟）」に関わる理論的な領域として考えなくてはならないからである。

バフチンが「構想段落」において、その「I部」の内容の要約として「思考ではなくて体験される現実の世界の結構の根本的な要因」と記し、「思考」を差引いてわざわざ「思考ではなくて」を強調しているのは、具体的に「II部」以降で展開される「芸術（美的活動）」、「道德（政治の倫理学）」、「宗教」の3つの領域へのバフチンの「行為の哲学」の認識の適用を考えているからだと思われる。ただし、バフチンの「行為の哲学」が「認識」の領域への働きかけを含む場合、例えば『行為の哲学・序論』部分などは、「認識」の領域を中心に他の3つの領域にも働きかけているので、「4つの領域」を対象にしている、とみなすことができる。

それにはまず、「行為の哲学」におけるもっとも根本的なもの、つまり「理念」的なものが必要であるということである。そして、その根本的なものは、バフチンが対象にする3つの領域へ共通に用いることができる要因でなければならない。というのも、この根本的なもの無くしては、上記に稿者が仮説したバフチンの意図の実現は不可能だからである。

こうした視点から『行為の哲学・序論』を見直すと、バフチンは「行為の哲学」という思想の根本的な要因、4つの領域に共通する「理念」的なものを明示している決定的な箇所が浮き上がってくる。それは『行為の哲学・序論』の終わりに近く、さらに言えば「構想段落」の前の段落である。少し長くなるがとても重要な段落なので全文引用してみたい。

存在への唯一の参与をふまえて、行為がそこにみずからを定位してゆく世界——これこそが、道德哲学の対象なのである。けれども行為は、何かしら内容的に確定したものとしての世界を知らない。行為がかかわるのはただ、一個の唯一の人物であり、対象である。しかもそれらは行為にとって、個々の情動・意志的トーンにおいて与えられているのである。それは諸々の固有名詞からなる世界であり、これこれの対象と、生涯の特定の日付とからなる世界なのである。行為としての唯一の生の世界を、行為の内側から、存在における言いわけの無用さをふまえて、こころみに記述してみるならば、それは個的で唯一の、自己弁明の告白になるはずなのである。だが、現実に行為する意識たち（現実のリアルな構成要素としての意識たちから、単一で唯一の存在のできごととも構成されている）の、具体的で個別的な、繰り返しのきかないこれらの世界は、共通した一連の要因をもつ。その要因は、普遍的な概念や法という意味で共通なのではなく、これらの世界の具体的な結構を構成しているという意味で共通なのである。行為の現実の世界がもつこの結構を、道德哲学は記述しなければならない。抽象的な図式ではなくて、単一で唯一の行為の世界がもつこの具体的な平面を、行為の世界を構成する基本的で具体的な諸要因とその相互的な配置を、記述しなければならないのである。その要因とは、自分にとってのわたし、わたしにとっての他者、そして他者にとってのわたしである。現実の生と文化のすべての価値は、

行為の現実世界をかたちづくるこれらの基本的な結構上の点のまわりに配置されている。学問的な価値も、美的な価値も、政治的な価値（倫理的および社会的な価値もふくむ）も、そして最後に宗教的な価値も、すべてそうなのである。空間的・時間的な価値や関係、そして内容的・意味的な価値や関係のすべてが、わたし、他者、他者にとってのわたしという、これらの情動・意志的な中心の要因に集結させられているのである。⁶⁷ [下線稿者]

上記の段落が『行為の哲学・序論』における他の段落と異なる点は、この段落にはバフチンの理論主義批判のモードが全く入っていないという点である。つまり、この段落においてバフチンは、自らの視線を批判モードの時の対象、すなわち、理論主義には全く向けずに、真正面から全視野の中で「行為の哲学」の地平に向けている。より具体的な言い方をすれば、「道徳哲学の対象」である「行為がそこにみずからを定位してゆく世界」に向けている。そしてバフチンの視線は、段落の最後では「構想段落」で想定されている4つの領域（「学問的な価値」、「美的な価値」、「政治的な価値（倫理的および社会的な価値もふくむ）」、「宗教的な価値」）へ並列的に拡散するのであるが、その途中で4つの領域に共通するものに立ち寄っている。その共通するものとは、「結構」という概念（原理）とそれを構成する3つの要因——「自分にとってのわたし」、「わたしにとっての他者」、「他者にとってのわたし」——である。これらが、「大部の哲学書」を展開する上でもっとも重要な「行為の哲学」の根本的なもの、「大部の哲学書」を体系と見立てた観点から言えば、「行為の哲学」の「理念」的なものである、とすることができるかもしれない。関連してひとつだけ付言するならば、この段落で示されている「行為の哲学」における「理念」的な3つの共通する要因——「自分にとってのわたし」、「わたしにとっての他者」、「他者にとってのわたし」——は、2章の最後に引用した、バフチンが「哲学的人間学」に関して記述するために用いている言葉の点からも（「自分の私と他人の私、私にとつての他人と」）、並列表記という表現的な特徴でも、全く一致しているということである。

ところで、「行為の哲学」の理念に相当する「結構」という概念とそれを構成する3つの共通の要因が、「構想段落」以前の『行為の哲学・序論』のテキストにおいて、どれくらいの回数で出現しているのかという点について、ロシア語のテキスト『1920年代論文集』⁶⁸をベースに調べてみると、「結構(архитектоника)」に関連する語（語幹が同一の語）は前半の段落(p.18)で1回登場しているだけである。それも、この用語が使われているコンテキストには、バフチンの批判的なモードが入り込んでいる。また、3つの要因、「自分にとってのわたし(я-для-себя)」、「わたしにとっての他者(другой-для-меня)」、「他者にとってのわたし(я-для-другого)」に関しては、「自分にとってのわたし」と「わたしにとっての他者」が1回ずつ、それも同じコンテキストで使われている(p.46)だけで、「他者にとってのわたし」は使われ

ていない。このような「行為の哲学」の核になる概念用語の使われ方からして、先に述べた「行為の哲学」の地平の説明が十分でないことは分かるであろうし、そのことから生じる「大部の哲学書」の構想を前提としたバフチンの課題も容易に理解できるであろう。それは、これらの概念・用語そのものの説明である。

以上のことから、バフチンがなぜ「構想段落」の文章において「大部の哲学書」の「I部」（つまり、『行為の哲学・I部』）において、「思考ではなくて体験される現実の世界の結構の根本的な諸要因」の内容について展開すると構想したのかが理解できるのではないであろうか。それは、3つの文化の領域（芸術、道徳、宗教）において「行為の哲学」に拠る理論的な展開を意図したからであり、更には、『行為の哲学・序論』において説明が不十分であった「行為の哲学」の根本的な理念を概念的に説明しようとしたからだ、と考えることができる。実際に『行為の哲学・I部』において、「行為の哲学」の理念的なものの説明がなされているのか、という点については、最後に2つのことを示すだけで十分なように思われる。ひとつは、『行為の哲学・I部』の中での2つの用語、具体的には「結構」と「理論」に関連する用語（語幹ベース）の使用頻度の事実である。特に「理論」に関する用語の回数は『行為の哲学・I部』において、バフチンの関心が理論主義への批判から「行為の哲学」の方に移行したことを示してくれるのではないかと、思われる。まず「結構」に関する語の頻度についてであるが、この語は『行為の哲学・序論』においては、既に説明したとおり「構想段落」とその直前の「行為の哲学」の理念的な説明の段落以外に用いられているのは1回だけであったが、『行為の哲学・I部』においては55回使用されている。一方、「理論」に関わる語は『行為の哲学・序論』においては140回用いられているが、『行為の哲学・I部』での使用は7回だけである。そして、最後に『行為の哲学・I部』の内容を象徴的に表わしているひとつの段落を提示することによって本節の考察を終えたい。

この世界は、具体的で唯一の世界として、存在におけるわたしの唯一の位置から、わたしに与えられている。わたしの関与的な行為する意識にとって、結構全体としてのこの世界は、わたしの行為が生じ現われるところのあの唯一の中心の周りに配置されるように、わたしの周りに配置されている。つまり、わたしの見る行為、思考する行為、実践する行為においてわたしがわたし自身の内側から現れる限りにおいて、わたしはこの世界と出会うのである。⁶⁹

3-4 『行為の哲学・I部』と『美的活動における作者と主人公』との関係

本稿最後の考察を展開するに当たり、前節までで稿者が確認したこと、明らかにしたことを

ここで一旦まとめておきたい。

前節までに『行為の哲学・序論』と『行為の哲学・I部』の具体的な検討から明らかになったことは、バフチンが「近代、それも19世紀と20世紀にのみ特徴的」な哲学の「理論主義」とその理論主義に拠って立つ諸文化の理論一般を批判的に乗り越えることによって、バフチン自らの新しい認識、すなわち「行為の哲学」の地平において、諸文化の理論の再構築をめざし「大部の哲学書」を構想したことである。また、その「大部の哲学書」の序論に相当する『行為の哲学・序論』は、当時の哲学の理論主義的な傾向とそれに拠って立つ文化理論一般の批判を、バフチンの新しい認識である「行為の哲学」を立て、具体的には、「行為の哲学」の中心で理念的な用語を用いながら展開するという批判的認識論の様相を呈していること、そしてそれが問題提起として「大部の哲学書」の「序論」としてはふさわしいことを確認した。また、「大部の哲学書」の「I部」(=『行為の哲学・I部』)では、「序論」(=『行為の哲学・序論』)におけるバフチンの批判にかかる比重が大きかったために、「行為の哲学」の理念を十分に説明できなかったこと、それゆえに「I部」では、「II部」以降で行う文化の諸領域の文化理論の構築のために、「序論」における批判的な要素を取り除き「行為の哲学」の「理念」的なものの説明に比重を移さねばならなかったこと、さらには、実際に稿者の論証によって、「I部」では「行為の哲学」の「理念」についての説明の方向性が示されていること、などを明らかにすることができた。

以上、前節までのまとめを記述してきたが、ここから明確に分かることは、『行為の哲学』によせて(全体)のテキストにかかわるバフチンの〈書く行為〉および思考には、「構築的な体系性」を目指す志向がある、ということである。それは、トドロフがその著書『対話の原理』で読み取らなかった、あるいは否定した「ひとつの建造物」としての体系性である。この建築術的体系性については、説明するまでもないが、「大部の哲学書」の構想自体が象徴的に物語っている。この構想においては、すべての想定されるテキストが「序論」、「I部」、「II部」……、と順番に積み重なって完成されていくイメージが根底に流れている。それでは『行為の哲学』によせて(全体)を起点とする構築的な体系性とトドロフの指摘する『美的活動における作者と主人公』から始まる「系列的な体系性」との間にあるこの差異をどのように考えたらいいのであろうか。この点を本稿の最後で検討していきたい。そのためには、視点および起点を『行為の哲学』によせて(全体)に定め、「大部の哲学書」の「I部」である『行為の哲学・I部』と「大部の哲学書」の「II部」に相当する『美的活動における作者と主人公』がどのような関係になっているのか、という問題を検討することが重要に思われる。

『美的活動における作者と主人公』はそもそも草稿から編纂者によって製版されたテキストであり、その全体の構成と各章の章題についてはすでに3-1で示している通りである。『美的

活動における作者と主人公』は最初の部分を欠いた「第1章断片」から始まり「第6章」まであるテキストである。そして、公開に関しては、「第1章断片」を除いての「第2章」から「第6章」までが1978年刊の『言語芸術作品の美学』にまとめられて公開され、「第1章断片」のみは『行為の哲学によせて（全体）』とともに1986年モスクワ刊のソビエト科学アカデミーの年鑑『科学と技術の哲学と社会学、1984 - 1985年』に初めて掲載された。

ところで今まで『美的活動における作者と主人公』については、構成や公開などテキストに関する書誌的な側面にしか焦点を当ててこなかったが、この考察ではその内容面に立ち入りたいている。そしていきなりだが、その内容に関してひとつ断りを入れて置かなければならないことがある。実は今までに稿者が前提にしてきたことと食い違う問いを投げかけるからである。稿者がこの著作に関して前提にしてきたことは、『美的活動における作者と主人公』が「大部の哲学書」の「Ⅱ部」に相当するという見解であった。そしてその見解を前提に今まで議論を続けて来た。しかし、ここで投げかけるのは、それでは本当に、『美的活動における作者と主人公』は「大部の哲学書」の「Ⅱ部」に相当するのか、という問いである。

まず、『美的活動における作者と主人公』には「大部の哲学書の構想の美的活動の部分に相当するもの」というイメージが一般的には付いている⁷⁰。このイメージが明確に付与されたのは、「大部の哲学書」の「構想段落」が含まれた『行為の哲学・序論』が公開された以降（つまり、1986年以降）のことだということは容易に推測できるであろう。この「構想段落」には、「大部の哲学書」の「Ⅱ部」の内容として「行為としての美的活動を、その所産の内側からではなく、責任ある参与者としての作者の観点から検討し、さらに〔二語判読不明〕芸術的創造の倫理学を検討することになる」と明確に記されているし、実際に『美的活動における作者と主人公』の内容と一致するからである。

ところが、この見解に基づき、今まで検討してきた「行為の哲学」の軌道の流れで『美的活動における作者と主人公』を当てはめてみた場合——つまり、「大部の哲学書」における〈序論〉→「Ⅰ部」→「Ⅱ部」の構成の中の「Ⅱ部」に『美的活動における作者と主人公』を当てはめてみた場合——、どうもしっくりとこない、ある種の違和感を稿者は覚えるのである。このことは、逆に『美的活動における作者と主人公』の側から「大部の哲学書」の「序論」と「Ⅰ部」を見た場合でも同じで、この視野からでは『美的活動における作者と主人公』がその前のテキストに接続している、というイメージがつかめないのである。つまり、『行為の哲学によせて（全体）』と『美的活動における作者と主人公』の間にはある種の断絶あるいは不連続（ずれ）が存在する、と考えられるのである。

この不連続（ずれ）を検討していく際に重要になるのが、「大部の哲学書」の「Ⅰ部」に当たる『行為の哲学・Ⅰ部』と「Ⅱ部」の冒頭に当たる『美的活動における作者と主人公』の「第

1章断片(以下、「第1章断片『美的活動』」)の2つのテキストである。ちょうどこの部分が「大部の哲学書」において両方のテキスト全体の接合点になるからである。それではこの2つのテキストについて少し詳しく見ていくことにしよう。まず、2つのテキストの共通性・類似性についてである。

この2つのテキストの編纂者であるボチャロフは、まず、『行為の哲学・I部』と「第1章断片『美的活動』」を対象にしながら、「これらの両方のテキストにはとても似た組織立った表現が存在している」と指摘し、さらには、「この2つのテキストには、プーシキンの同じ詩の分析のヴァリエーションを見出せる」と説明している⁷¹。ちなみに、ボチャロフがここで指摘している分析とは、バフチンが双方のテキストで展開しているプーシキン(Alexander Pushkin: 1799-1837)の抒情詩『別離(Разлука)』を対象にした分析である。この分析で特徴的な点は、同じ詩人、同じ作品というだけでなく、同じ詩行が分析の際に用いられているという点である⁷²。ボチャロフは、この2つのテキストの類似性の根拠を最終的には、特定のテーマや考えについてのバフチンのヴァリエーションへの偏愛⁷³に、またドロフの言い方を借りれば、バフチンの「反復」や「際限なく再開される捉え返し」の傾向に求めている。確かにこの2つのテキストの類似性をこのような見解に落ち着かせるのは稿者もうなずけるのであるが、しかし、「大部の哲学書」の「I部」と「II部」の連続性という観点から考えた場合、どうして同じ似たような表現が複数必要なのか、どうして同じ作家の同じ作品、それも同じ詩行を用いた分析が同じ「大部の哲学書」の中の隣り合ったテキストどうしにそれぞれ存在しなければならないのか、という疑問が当然のごとく生じて来る(この点に関して、『行為の哲学によせて(全体)』の英語版訳者であるリャプーノフは、このあと稿者が展開する考察のように、『行為の哲学・I部』の詩の分析と「第1章断片『美的活動』」における詩の分析との類似性をバフチンの目的の違いとして捉えている⁷⁴)。

こうした問いへの解答は、ひとつしかないように思われる。つまり、「大部の哲学書」の「I部」としての『行為の哲学・I部』と「第1章断片『美的活動』」はその機能が異なる、ということである。つまり、内容的には『美的活動における作者と主人公』は、「大部の哲学書」の「II部」に相当するし、その著作そのものは「大部の哲学書」の一部として最初は書かれ始めたかもしれないが、最終的には新しい序論としての「第1章断片」を有する、「大部の哲学書」の体系とは別のテキストとして書かれたのではないか、ということである。これはあくまでも稿者の仮説であるが、この仮説を論証していくためにも、『行為の哲学・I部』と「第1章断片『美的活動』」の接合部に関する別の角度からの問題を検討しなければならないであろう。

『行為の哲学・I部』は、今まで説明してきたように、「大部の哲学書」の「II部」、「III部」、「IV部」という各文化の領域の理論を構築的に展開する上で、とても鍵になる部分であり、そ

こには「Ⅱ部」、「Ⅲ部」、「Ⅳ部」を貫く共通の「行為の哲学」の理念、言い換えれば「建造物」の土台部分が無ければならず、それを説明する（礎石を築く）といったことが「Ⅰ部」におけるバフチンにとっての内的な課題であることは既に推察した通りである。この側面は、単純化すれば、「Ⅰ部」に対して「Ⅱ部」、「Ⅲ部」、「Ⅳ部」がある意味並列的な関係にあるということでもある。もちろん、関与的な思考の持ち主であるバフチンがこうした単純な関係性のみをイメージしていたということは考えづらいが、「序論」から「Ⅳ部」までの「大部の哲学書」における諸要因（つまり諸章）で構成され得る関係のひとつとしてこの並列的な関係を考察の上では含み入れても構わない気がする。そして、この並列的な関係性を前提にした場合、別の問いが浮かび上がる。つまり、「Ⅱ部」➡「Ⅲ部」➡「Ⅳ部」という「大部の哲学書」の内部における時間的系列には意味があるのか、それともないのか、という問いである。もし、この点に特別にバフチンが付与した意味がなければ、別に「Ⅱ部」に「道德」の領域を、「Ⅲ部」に「宗教」の領域を、「Ⅳ部」に「芸術（美的活動）」の領域を入れ込んでもいいわけである。このことに関して稿者が考えるのは、「Ⅱ部」に「美的活動」の領域を持ってきたのにはバフチンの意識あるいは意図が存在した、ということである。それは「Ⅰ部」（『行為の哲学・Ⅰ部』）における次の引用箇所が間接的にだが明確に示してくれるであろう。

こうした具体的で価値的な結構の可能性についての準備的な見方を提供するために、ここで美的に見る眼の世界、すなわち、芸術の世界を分析してみよう。具体性と情動・意動的トーンに貫かれているという点で、この世界は、抽象的で（切り離されている）どんな文化の諸世界よりも、単一で唯一の行為の世界に近い。この世界の分析は、出来事としての現実世界の結構の構造についての理解へ私たちをより近づかせてくれるはずである。⁷⁵

上記引用には、「大部の哲学書」の「Ⅰ部」（『行為の哲学・Ⅰ部』）において、「行為の哲学」の理念に相当する「結構」の概念とそれを構成する3つの共通な要因——「自分にとってのわたし」、「わたしにとっての他者」、「他者にとってのわたし」——を、「芸術（美的活動）」の領域におけるイメージ（つまり「作者／わたし」と「主人公／他者」のイメージ）を用いて、「準備的な見方」として説明しようとしているバフチンの意図がうかがえる。さらにその意図には、「大部の哲学書」の「Ⅲ部」および「Ⅳ部」への適応、「単一で唯一の行為の世界」あるいは「出来事としての現実世界」への適応も踏まえられている。このバフチンの意図から推察できることは、バフチンはこの意図をより深化させるために「Ⅱ部」（『美的活動における作者と主人公』第2章～第6章）を書こうと構想していたのではないか、ということである。このことは、すでに3-1で示した第2章から第6章の章題から象徴される内容（具体的には、第2章「主人公

に対する作者の関係の問題」、第3章「主人公の空間的形式」、第4章「主人公の時間的全體」、第5章「主人公の意味的全體」、第6章「作者の問題」が、「芸術」の領域、つまり、美学的（文藝的・詩学的）領域に限定された内容ではなく、他の認識の領域、道徳の領域、宗教の領域の内容をアレゴリー的に含んでいることを意味する。ちなみに、こうした内容の象徴性は、「〈作者〉と〈主人公〉」という二対のキーワードをそれぞれの文化の領域に適合するキーワードに変更してみるとよく分かるであろう。例えば、認識の領域ならば、「〈わたし〉と〈他者〉」、「〈読者〉と〈テキスト=他者〉」などに、宗教の領域ならば、「〈わたし〉と〈神〉」に、のように。

しかし、バフチンは「大部の哲学書」の「Ⅰ部」（『行為の哲学・Ⅰ部』）を「Ⅱ部」（『美的活動における作者と主人公』第2章～第6章）への導入として書き終えなかった。つまり、「大部の哲学書」の「Ⅱ部」、「Ⅲ部」、「Ⅳ部」の礎石として書き終えなかったのである。その代わりに、バフチンは「Ⅱ部」（『美的活動における作者と主人公』第2章～第6章）のために、その「Ⅰ部」そのものを「第1章断片『美的活動』」として書き換えたのではないだろうか。そう考えて見ると、先に説明したプーシキンの詩の2つの分析における類似性も納得することができるであろう。さらに、この点に『行為の哲学によせて（全体）』を起点とする構築的な体系性とドロフの指摘する『美的活動における作者と主人公』から始まる系列的な体系性の差異（ずれ）が存在しているように思われる。つまり、端的に言えば、バフチンは「大部の哲学書」の構想に見られる構築的な体系性を一旦は放棄したのである。

それではなぜバフチンは構築的な体系性を放棄したのであるだろうか。様々な理由が考えられるが、現在、稿者が重要だと思うのは2つある。ひとつは、構築的な体系性を放棄しても残るものが存在するからである。もうひとつは、構築的な体系性そのものに対するバフチンの疑念である。特に後者の理由に関しては、『芸術と責任』と『行為の哲学によせて（全体）』とを結ぶバフチンの初期における哲学的な活動、特に、カントやヘルマン・コーエンなどのドイツ観念論哲学の影響やネーヴェリ学派と深くかかわるので、このテーマに関しては別稿で展開することにしたい。

最後にひとつめの理由、構築的な体系性を放棄しても残るものについて言及して本稿を終えたいと思う。その残るものとは、視野を変えれば、系列的な体系性に引き継がれるものでもある。それは、バフチンの構築的な体系性における「理念」的なものである。具体的には「結構」の概念とそれを構成する3つの共通の要因——「自分にとってのわたし」、「わたしにとっての他者」、「他者にとってのわたし」——であり、さらに、「芸術」の領域において具体性を獲得したその「理念」的なもののヴァリエント、〈作者〉と〈主人公〉に関わる諸イメージである。これらの具体化されたバフチンの「理念」的なものは、構築的な体系性の外部でも機能できるものであり——それ故に系列的な体系性に引き継がれたとも言うことができる——、下記の表

に示すように、文化の諸領域に相応しい形に変形することも可能なものなのである。

理念的要因	自分にとってのわたし	わたしにとっての他者	他者にとってのわたし
芸術の領域	作者にとってのわたし	作者にとっての主人公	主人公にとってのわたし
認識の領域	読者にとってのわたし	読者にとっての 〈テキスト=作者〉	〈テキスト=作者〉 にとってのわたし
道徳の領域	自分にとってのわたし	わたしにとっての他者 (=名前をもった他者)	他者(名前をもった他者) にとってのわたし
宗教の領域	自分にとってのわたし	わたしにとっての神	神にとってのわたし

注

- 1 *Mikhail Bakhtin*, Katerina Clark and Michael Holquist (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1984), pp.1-6. (邦訳)『ミハイール・バフチーンの世界』カテリーナ・クラーク/マイケル・ホルクイスト 川端香男里・鈴木晶訳 1990 せりか書房 pp.15-21.

ちなみにクラーク&ホルクイストが次のように説明するバフチン像は、稿者のイメージにとても近いものである。「バフチン自身は、自分を何よりもまず文学理論家だとは考えていなかった。自分がやろうとしていることにいちばん近いと考えていた言葉は哲学的人間学である。彼は自分の取り組んでいる多種多様な主題の一つ一つが重要だと考えていた。しかし同時に彼はそれらの主題を、哲学的な問題を解明するための手段とも見なしていた。彼のさまざまな主題、仮面、声のすべてに共通するもっとも重要な目標が哲学的探究なのだ考えると、いくつものバフチン像が融け合って、ひとつのもっとも包括的なバフチン像が浮かび上がってくる。」(邦訳 p.18)

- 2 『バフチン——対話とカーニヴァル』北岡誠司 1998「現代思想の冒険者たち第 10 巻」講談社 p.414.
- 3 *Mikhail Bakhtin: le principe dialogique suivi de Écrits du Cercle de Bakhtine*, Tzvetan Todorov (Paris: Seuil, 1981). (邦訳)『ミハイール・バフチン 対話の原理』ツヴェタン・トドロフ 大谷尚文訳 2001「叢書・ユニベルシタス 714」法政大学出版局.
- 4 *Toward a Philosophy of the Act*, M. M. Bakhtin, ed. Vadim Liapunov and Michael Holquist, trans. and notes by V. Liapunov (Austin, TX: University of Texas Press, 1993).
- 5 なお本稿を執筆するにあたり、稿者はバフチンの初期の活動とバフチンの全体像の構築という観点を踏まえた佐々木寛の以下の6つのバフチン研究の著作から多くの基本的な情報および視座を得ていることを先に述べておきたい。①「バフチンの出発点」佐々木寛『現代思想』1990年2月号(特集:バフチン) 青土社 pp.70-75、②「バフチンにおける「声」の問題」佐々木寛『交錯する言語』新谷敬三郎教授古希記念論文集刊行委員会編 1992 名著普及会 pp.367-387、③「バフチンの

テキスト理論の根底にあるもの」佐々木寛 信州大学人文科学論集(文化コミュニケーション学科編) 33:169-189(1999)、④「解題」佐々木寛『[行為の哲学によせて][美的活動における作者と主人公] 他』ミハイル・バフチン 1999『ミハイル・バフチン全著作第一巻』水声社 pp.491-499、⑤「バフチンと1920年代前半のロシア」佐々木寛 同前 pp.501-527、⑥「桑野隆『バフチン』(平凡社新書,2011年)を批判的に読む:バフチンの受容の死点克服のために」佐々木寛 信州大学人文科学論集 2:273-286(2015)。

6 前掲1 p.3. (邦訳) p.17.

7 この「サークル」については、「バフチン・サークル」あるいは「ネーヴェリ学派」の2つの呼称が研究者の間では一般的に使われてきた。「ネーヴェリ学派」という呼称については、サークルの実態はより個人的・精神的にメンバーが結びついたグループであり、学的結集力と社会的影響力という点では「学派」というネーミングにはそぐわない、といった否定的な見解もある。しかし、一方で「バフチン・サークル」という呼称だとバフチンを象徴的かつ中心的な存在に捉えてモノローグ的なサークルとして見做してしまう可能性もある。本稿ではバフチン初期の活動に重きを置き、サークルの他のメンバーのバフチンへの学的影響等もバフチンの体系的かつ哲学的な思想を考察する上では重要な要因になると考えている。それゆえに、サークル内におけるバフチンを対話的・関与的な定位に置くことができる「ネーヴェリ学派」の方の呼称を本稿では用いることにする。

8 “Introduction to M. M. Bakhtin’s Lectures and Comments of 1924-1925 from the Notebooks of L. V. Pumpiansky”, N. I. Nikolaev, trans. Leonid Livak, revised by Alexandar Mihailovic in *Bakhtin and Religion: A Feeling for Faith* (pp.194-205), ed. Susan M. Felch and Paul J. Contino (Evanston, IL: Northwestern University Press, 2001), pp. 194-195.

N. ニコラーエフの説明によれば、「ネーヴェリ哲学学派」は、バフチン、プンピャンスキイ、カガーンの他にヴィテプスク時代から学派に参加したソレルチンスキイも含まれるが、稿者はここではネーヴェリ時代のことに限定しているのでソレルチンスキイを含ませていない。

9 “Preface to the English Edition to M. M. Bakhtin’s Lectures and Comments of 1924-1925 from the Notebooks of L. V. Pumpiansky”, Vadim Liapunov, in *Bakhtin and Religion: A Feeling for Faith* (pp.193-194), ed. Susan M. Felch and Paul J. Contino (Evanston, IL: Northwestern University Press, 2001), p.194.

10 “M. M. Bakhtin’s Lectures and Comments of 1924-1925 from the Notebooks of L. V. Pumpiansky”, Lev Pumpiansky, ed. and notes by N. I. Nikolaev, trans. Vadim Liapunov, in *Bakhtin and Religion: A Feeling for Faith* (pp.205-237), ed. Susan M. Felch and Paul J. Contino (Evanston, IL: Northwestern University Press, 2001).

11 前掲1 p.41. (邦訳) p.63.

- 12 「歴史と超越——カガンとバフチン」野中進『ミハイル・バフチンの時空』せりか書房編 1997 せりか書房 p.251.
- 13 前掲 1 p.42. (邦訳) p.64.
- 14 前掲 3 p.13. (邦訳) p.10.
- 15 前掲 8 pp.194-195.
- 16 前掲 1 p.57. (邦訳) pp.82-83.
なお、ここに限らず以降の本稿の引用についてはすべて、すでに翻訳のあるものについては参照し頁数を示すが、引用文は文脈に応じて適宜変更を加えている場合があることを断っておきたい。翻訳のないものについては、すべて稿者による訳である。また、バフチンの著作の引用については基本的には邦訳版を用いるが、考察の際にはロシア語版を用いる箇所もある。
- 17 前掲 8 p.198.
- 18 同上 pp.198-199.
- 19 『体系的見地より観たるヘルマン・コーヘンの哲学的業績』パウル・ナトルプ 相原信作訳 1930「哲学論叢 34」岩波書店.
- 20 『人、教師及び学者としてのヘルマン・コーヘン』パウル・ナトルプ 相原信作訳 1928「哲学論叢 9」岩波書店.
- 21 同上 p.23.
- 22 N. K. ボネツカヤは、哲学的な伝統におけるバフチンの立場について言及している箇所で、「晩年の談話でバフチンはヘルマン・コーエンを彼にとってもっとも影響ある思想家の一人と認めている」という事実を指摘している（「ミハイル・バフチンと解釈学思想」N. K. ボネツカヤ 野中進訳『ミハイル・バフチンの時空』せりか書房編 1997 せりか書房 p.240）。
- 23 『カント事典』有福孝岳他編 2014 弘文社 p.318.
- 24 前掲 3 p.145. (邦訳) p.173.
- 25 北岡誠司はトドロフの『対話の原理』を読書案内するにあたり、バフチンの全体像構築の試みの必要性を次のように示唆的に語っている。「バフチンへの関心は、今日、学際的になっている。それにともない、当然、それぞれの学や領域に特有の観点からバフチン思想に関心を寄せ、バフチン思想の、全体ではなく、特定の面に主に焦点をあてる傾向が、ひろく認められようになった。むしろこれは避けがたいことだろう。がこの傾向があまりすすむと、バフチンも、ラカンのいう鏡像段階前の幼児の場合のように、多数の部分像に分裂し、単純化された部分像が散乱しかねない。バフチン関連文献が氾濫する今日こそ、たとえ未完でも、バフチンの全体像を示す必要が逆にますます高まっている。」（前掲 2 p.414）
- 26 前掲 3 p.26. (邦訳) p.25.

- 27 同上 pp.25-26. (邦訳) pp.24-25.
- 28 前掲 23 p.160.
- 29 「芸術と責任」(佐々木寛訳)『[行為の哲学によせて] [美的活動における作者と主人公] 他』ミハイル・バフチン 1999「ミハイル・バフチン全著作第一巻」水声社 p.13.
- 30 「美的活動における作者と主人公」(佐々木寛訳)『[行為の哲学によせて] [美的活動における作者と主人公] 他』ミハイル・バフチン 1999「ミハイル・バフチン全著作第一巻」水声社.
 ちなみにトドロフは『対話の原理』の中ではバフチンのこの著作を「1922年」に書かれたものと想定している。
- 31 「人文科学方法論ノート」(新谷敬三郎訳)『ことば 対話 テキスト』ミハイル・バフチン 新谷敬三郎他訳 1988「ミハイル・バフチン著作集 8」新時代社.
 この著作は、バフチンが1930年代の終りから40年代にかけて書いた覚書「人文科学の哲学的基礎に」を1974年初めに改めて書き直したものであり、バフチンの最後の仕事になった覚書である(p.353を参考)。
- 32 「より大胆に可能性を利用せよ」(桑野隆訳)『ドストエフスキーの創作の問題』ミハイル・バフチン 桑野隆訳 2013「平凡社ライブラリー」平凡社.
 この著作は、『ノーヴィ・ミール(新世界)』誌編集部からの書簡(1970年9月8日付)による依頼に答えてバフチンが執筆した原稿で、その年の11月号に掲載されたものである(p.380を参考)。
- 33 「1970 - 71年の覚書」(新谷敬三郎訳)『ことば 対話 テキスト』ミハイル・バフチン 新谷敬三郎他訳 1988「ミハイル・バフチン著作集 8」新時代社.
 この著作は、バフチンが1970年5月から1971年12月までモスクワ都下のクリモフスクにいたときに書いたノートからの抜粋をまとめたものである(p.353を参考)。
- 34 前掲 3 p.153. (邦訳) p.183.
- 35 前掲 32 p.381.
- 36 前掲 30 pp.160-161. [前掲 3 p.147. (邦訳) pp.175-176.]
- 37 前掲 32 pp.345-346. [前掲 3 pp.168-169. (邦訳) pp.202-203.]
- 38 前掲 31 p.340. [前掲 3 p.168. (邦訳) p.201.]
- 39 前掲 33 pp.304-305.
- 40 前掲 3 pp.173-176. (邦訳) pp.209-213.
- 41 “Introduction to the Russian Edition”, S. G. Bocharov, trans. Vadim Liapunov, in *Toward a Philosophy of the Act* (pp.xxi-xxiv), M. M. Bakhtin, ed. Vadim Liapunov and Michael Holquist (Austin, TX: University of Texas Press, 1993), p.xxiii.
- 42 「解題」(佐々木寛)『[行為の哲学によせて] [美的活動における作者と主人公] 他』ミハイル・バ

- フチン 1999 「ミハイル・バフチン全著作第一巻」水声社 p.494.
- 43 『バフチン』桑野隆 2011 「平凡社新書」平凡社 p.30.
- 44 前掲 41 p.xxiii.
- 45 「目次」『[行為の哲学によせて] [美的活動における作者と主人公] 他』ミハイル・バフチン 1999 「ミハイル・バフチン全著作第一巻」水声社 pp.8-9.
- 46 前掲 42 p.496.
- 47 トドロフが『対話の原理』(1981)を執筆した時に参照した『美的活動における作者と主人公』のテキストは、著作における「バフチンとバフチン・サークルの著作の年代順リスト」から判明する。その際トドロフが参照したロシア語の文献は、3点ある。第1点目は、ソビエト科学アカデミー哲学研究所編集の雑誌『哲学の諸問題』(1977年第7号)で、そこには第6章「作者の問題」が掲載されている。第2点目は、『文学の諸問題』誌(1978年第12号)で、第2章「主人公に対する作者の関係の問題」と第3章「主人公の空間的形式」の抜粋が掲載されている。最後の3点目は、1979年刊のバフチンの論文集『言語芸術作品の美学』で、ここには第2章から第6章までのテキストが掲載されている(稿者が以上の書誌情報を得たのは、前掲42の佐々木寛の「解題」からである)。以上のことは同時に、トドロフが『対話の原理』を執筆していた段階では、『美的活動における作者と主人公』の「第1章断片」は公開されておらず、当然、トドロフの視野に入っていなかったということでもある。それゆえにトドロフは、「第1章は失われている(le premier est perdu)」と説明していると思われる。
- 48 前掲 41 p.xxii.
- 49 前掲 1 pp.53-54, p.63. (邦訳) p.78, p.89.
- 50 「行為の哲学によせて」(佐々木寛訳)『[行為の哲学によせて] [美的活動における作者と主人公] 他』ミハイル・バフチン 1999 「ミハイル・バフチン全著作第一巻」水声社 p.84.
- 51 “Translator’s Preface”, Vadim Liapunov, in *Toward a Philosophy of the Act* (pp.xvii-xix), M. M. Bakhtin, ed. Vadim Liapunov and Michael Holquist (Austin, TX: University of Texas Press, 1993), p.xvii.
- 52 『哲学事典』1985 平凡社 p.1154.
- 53 *La Formation de l’esprit scientifique*, Gaston Bachelard (Paris: J. Vrin, 1938), pp.13-14. (邦訳)『科学的精神の形成』ガストン・バシュラール 及川馥訳 2012 「平凡社ライブラリー」平凡社 p.24.
- 54 前掲 50 p.27.
- 55 同上 pp.31-34.
- 56 同上 p.43.
- 57 同上 pp.84-85.

- 58 同上 pp.42-43.
- 59 同上 p.20.
- 60 同上 p.42.
- 61 同上 p.20.
- 62 同上 pp.31-32.
- 63 同上 p.50.
- 64 同上 p.43.
- 65 同上 p.50.
- 66 前掲 30 pp.220-221.
- 67 前掲 50 pp.83-84.
- 68 “К философии поступка” , *Работы 1920-х годов*, М. М. Бахтин (Киев: Next, 1994), pp.9-68.
- 69 前掲 4 p.57
- 70 前掲 42 p.496, 前掲 41 p.xxii.
- 71 前掲 41 p.xxiv.
- 72 *Работы 1920-х годов*, М. М. Бахтин (Киев: Next, 1994) pp.61-63, pp.73-75.
- 73 前掲 41 p.xxiv.
- 74 “Notes” , Vadim Liapunov, in *Toward a Philosophy of the Act* (pp.77-100) , M. M. Bakhtin, ed. Vadim Liapunov and Michael Holquist (Austin, TX: University of Texas Press, 1993) , p.99.
- 75 前掲 4 p.61.